

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：15K16737

研究課題名（和文）多人数会話における参与：傍参与者による他者発話の再生についての相互行為研究

研究課題名（英文）Participation in multi-party interaction: Other-repetition of an utterance and bodily conduct in interaction

研究代表者

安井 永子 (Yasui, Eiko)

名古屋大学・人文学研究科・講師

研究者番号：30610167

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、会話において、話し手の発話や身体動作が、その発話の受け手、及び、それ以外の参与者（傍参与者）によって再生される現象を取り扱った。特に、これまで十分に検討されていない、(1) 身体動作の再生、及び、(2) 傍参与者による発話の再生に注目し、それらによって相互行為で何が達成されるのかについて検討した。自然会話のビデオデータを用いた相互行為分析により、受け手や傍参与者が、先行話者による発話や身体動作を単に繰り返すのではなく、それらを再利用することで、先行行為の特定の箇所に対する反応を埋め込みつつ、それをきっかけとした新たな行為や活動を構築する微細な過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、まだ研究の積み重ねがほとんどない、先行話者の身体動作と類似した身体動作を次話者が産出する「身体動作の再生（繰り返し）」について、一部明らかにしたことが挙げられる。また、発話の受け手以外の立場の参与者の振る舞いについてもこれまでの研究の蓄積がないのに対し、本研究は受け手以外の参与者が、再生という形式により話し手としての地位を達成する仕方に焦点を当てたことにも意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study dealt with the cases in which a speaker's utterance and bodily conduct are repeated by the subsequent speaker in interaction. Specifically, it focuses on: (1) the recipient's repetition of the prior speaker's bodily conduct, and (2) the side-participant's repetition of the prior speaker's utterance and bodily conduct, which have yet to receive much research interests. Through the multimodal analyses of the video data of naturally-occurring conversations, this study reveals that a speaker's utterance and bodily conduct are not simply repeated, but instead, reused by the recipient or side-participant to embody their response to the prior action as well as form a new action triggered by the prior one at the same time.

研究分野：会話分析、相互行為分析、マルチモーダル分析

キーワード：会話分析 相互行為分析 マルチモダリティ 発話と身体動作の他者反復 多人数会話

1. 研究開始当初の背景

会話において先行話者による音声発話の全体や一部を、次の話し手が再生する(繰り返す)現象については、様々な言語の会話を対象として研究がなされてきた(Clancy et al., 1996; Tannen, 1989; Brown, 1998; Schegloff, 1997 他)。自然会話における行為の連鎖組織に焦点を当てる会話分析の分野においては、Schegloff (1997) が、他者発話の一部や全体をそのまま繰り返すことにより、他者の修復の要求、情報受け取りの提示など、連鎖上の位置によって多様な行為が形成されると論じている。また、受け手が先行発話の(一部)繰り返しに助詞を付与したり、異なる音調を付与する場合は、先行発話に対する受け手の様々な態度やスタンスが示されることが報告されている。Stivers (2005) は、繰り返し形式に着目し、助動詞や be 動詞に音調的強勢を置く形式が、直前の発話に対する知識の優位性を主張できると論じている。研究代表者らは、先行発話で出た名詞に助詞「ね」を付与して繰り返すという特定の形式によって、繰り返された名詞に関して前の話し手が述べたことを自分が既に知っていた、という認識の主張がなされることを観察している(横森・安井・初鹿野., 2014)。

会話分析の分野では、他者の発話の繰り返しのみならず、先行話者によって産出されたジェスチャーがその直後に繰り返されたり、後の連鎖において再生される現象についても研究がなされている。まず、de Fornel (1992)は、先行話者によるジェスチャーを、発話の受け手が繰り返すことにより、その発話の受け取りと理解とが示されると述べている (return gesture)。また、発話の受け手が先行話者のジェスチャーと類似したジェスチャーを後の連鎖で産出することで、先行発話との話題的な繋がりや先行する連鎖との繋がり示す“tying device” (Sacks, 1992)となることを示した研究もある(Hayashi, 2003; 細馬, 2012; Koschmann & LeBaron, 2002; Murphy, 2005; Yasui, 2013)。更に、研究代表者はジェスチャーの再生形式に着目し(Yasui, 2013)、ジェスチャーが部分的に再生されたり、別の視点に置き換えられた形で再生されたりすることによって、前の発話に対して異なる反応を示すことができることを示している。これらの研究は、先行するジェスチャーと同様のジェスチャーが、別の話し手によって偶然産出されるのではなく、先行する発話への反応や理解を示す手段として産出されることが示されている。

上記の研究は全て、行為の受け手が、その行為への応答(つまり第二の位置)において先行発話や先行話者によるジェスチャーを再生する現象を扱ったものである。しかしながら、3名以上の参加者を含む多人数会話では、常に聞き手全員に向けて発話がなされるわけではなく、発話の直接の「受け手(addresssee)」となる聞き手、会話の場にいるものの発話を向けられない「傍参加者(side participant)」など、話題や活動によって、「参与役割(participation status)」(Goffman, 1981)が異なる多様な聞き手が存在する。また、「会話の順番交替規則」の枠組みでは、現在の話し手が次の話し手として指定した参加者が次に発話順番を取得するのが通常であるが(Sacks, et al., 1974)、実際の多人数会話では、次の話し手として選択された受け手以外が次に発話順番を取得し、話し始めることもある。これらを考慮すると、先行する行為の受け手でない傍参加者が、先行話者の次に、先行話者と同じ発話を産出することも可能であるが、傍参加者が先行発話や先行話者のジェスチャーを再生するケースについてはまだ研究はなされていない。また、先行話者による身体動作と類似した身体動作を後の話者が再生するケースについては、上記の通りジェスチャー以外の身体動作に注目した研究はなされていない。

2. 研究の目的

本研究課題は、日常の多人数会話において、他者によって産出された発話やジェスチャーを、別の参加者が直後に再生したり、別の連鎖において再生したりする現象を検討するものである。上述の通り、先行発話の一部または全体を、別の話し手が後に再生する現象については、既に研究の蓄積がある。それに対し、本研究では、これまで注目されることが少なかった次の2種類の再生現象に焦点を当てる。まず一つ目は、先行話者による身体動作の再生である。会話分析では、複数の資源が互いに補完し合い、マルチモーダルゲシュタルト(Mondada, 2014)として統合的に一つの行為を構築することを明らかにしてきた。同様に、本研究では、先行話者によるジェスチャーをはじめとする身体動作が、どのように後続の話し手によって再生され、それが何を達成されるかについて、身体動作の形の類似性のみならず、共起する発話やその構造の類似性にも注目して検討する。それにより、相互行為において、いかにして特定の身体動作が再生されたことが認識可能となるのかについて明らかにすると共に、従来定義されてきた「繰り返し」には含まれない現象(つまり、類似した身体動作が産出されつつも、それが必ずしも先行話者の身体動作の繰り返しとしては産出されない場合)についても明らかにすることを目指す(再生は、厳密な繰り返し以上の現象を含める)。

二つ目は、受け手以外の参加者による繰り返しである。これまでの会話分析研究では、先行す

る行為の「受け手」が、その行為への応答の中で、先行発話を繰り返す現象のみが取り上げられてきた。それに対し、本研究では、先行行為の受け手でない「傍参与者」やその他の周辺の参与者が、先行話者に続いて、その発話やその身体動作を再生する現象を検討する。近年、日常の会話の状況を明らかにしようという動機より、様々な立場の参与者を含む多人数会話や、身体の動きを伴いながら会話がなされる相互行為場面への注目が広がっている。同様に、多人数会話において、受け手のみならず、次の話し手として指定されていない傍参与者が、いかにして相互行為の進行に貢献するかを探ることにより、多人数会話における参与の形態の多様性を明らかにすることを第二の目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、自然発生的会話の録画をデータとして用いる会話分析研究であり、データ収録、データ編集及び音声発話と身体動作の書き起こし、分析、という4つの手順を踏んで行われた。

(1) データ収録：日常の様々な多人数会話における多様な参与者による、発話や身体動作の再生について検討するため、データ収録は以下の通り行った。

- ・ 会話が中心となる相互行為場面：家族や友人が3-7名ほどが一つのテーブルを囲んで会話する実生活場面を収録した。内訳は次の通りである：大人8人の会話、子どもを含む食事時の7人会話、クライアントと専門家による打ち合わせ時の4人会話。
- ・ 身体を使った活動における相互行為場面：ジェスチャーの繰り返しが起こりやすいと考えられる、身体の使用が中心となる活動（ダンスや折り紙などの教授場面、道具の使い方の説明場面、映像の描写を要する会話場面など）を収録した。

上記のように多様な場面における会話の収録により、これにより、相互行為での人々の参与形態や役割が様々に異なる中、参与者それぞれの振る舞いが、その時々相互行為にどう関わっているかを見ることが可能となった。

(2) データ編集と書き起こし：データ収録後は、データ内で先行発話や類似した身体動作が別の話し手によって産出される場面を選択し、書き起こし専用ソフトウェア(ELAN)を用いて、音声発話と身体動作の書き起こしを行った。会話分析の書き起こし手法(Jefferson, 2004)を用い、発話、笑い、息遣い、発話の重なり開始と終了点、沈黙の長さなどのほか、ジェスチャーや視線の動きや姿勢の変化とその開始と終了点も書き起こした(Lorenza Mondada(2007)による表記法を使用)。特に、先行する言語やジェスチャーの再生箇所については、その形(全体を繰り返し場合、部分的な再生である場合、再生の前後に別の語彙アイテムや動きが追加されている場合など)と、その開始と終了点を記録した。

(3) データ分析：ビデオデータと書き起こし資料の両方を用い、収集した事例を、状況(会話が起こっている活動)、先行発話の再生が起こった連鎖上の位置、再生の形式、などをもとに分類し、書き起こしとビデオデータをもとに分析を行った。その際、先行研究を参照し、以下に着目した。

1. 先行発話	・ 繰り返しの対象となる先行発話で、何が言われたか、ジェスチャーは産出されたか、視線は誰(どこ)に向けられているか ・ どのような行為を達成しているか
2. 再生の動作主	・ 発話の受け手 ・ 傍参与者
3. 再生の位置	・ 連鎖の開始となる第1の位置として産出された行為における発話や身体動作を再生する場合 ・ 先行する行為への応答(第2の位置)として産出された行為における発話や身体動作を再生する場合
4. 再生の形	・ 全体がそのまま再生される ・ 一部変更された形で再生される ・ 異なる視点に置き換えられた形で再生される
5. 再生が遂行する行為	・ 再生によって何が達成されるか ・ 先行発話と同じ行為の繰り返しか

4. 研究成果

研究期間全体で以下のような成果が得られた。

(1) 傍参与者による発話の繰り返し：

先行研究では、直前の発話の直接の宛先である「受け手」が、直前の発話の全体、もしくは一部を繰り返す発話が扱われることが多かった。それに対し、本研究では、直前の発話を直接宛てられていない（つまり、次の話し手として選択されていない）「傍参与者」が、直前の話し手の発話の全体もしくは一部の繰り返しを含む発話を産出後、会話への参与を達成するケースを分析対象とした。データからは、直前の話し手の発話（の一部）を繰り返すことで、傍参与者は、直前の発話への反応を示す一方で、その繰り返しを含んだ発話を組み立てることで、繰り返しの対象となった直前の話し手の発話（の一部）をきっかけとして新たな連鎖を開始することが観察された。つまり、傍参与者による直前の発話の繰り返しは、直前の発話の直接の応答ではない。そうではなく、直前の発話との関連を示しつつ、新たな連鎖を開始し、話し手としての地位を獲得する手段となっていることが明らかになった。

特に、直前の話し手の発話の一部を、その発話の傍参与者が繰り返すことによって「からかい」が組織される過程の分析では、繰り返された部分が、傍参与者のからかいの対象・きっかけであることが示されるだけでなく、そのような繰り返しをしながら、傍参与者が直前の話し手以外の参与者に視線と発話を向け、直前の話し手に指さしを向けることにより、視覚的にも直前の話し手をからかいの対象、視線を向けた参与者をからかい発話の宛先として示し、からかいを身体的にも組織していたことが明らかになった。そのような身体動作が、次話者として選ばれていない傍参与者が、発話順番を獲得して新たな連鎖を開始することを可能とし、新たな連鎖のための参与枠組みの提示も行っていると考えられる。

(2) 受け手による身体動作の再生：

これまでの研究では、先行話者による発話もしくはジェスチャーを、次の話者が直後に繰り返す現象に焦点が当てられてきたのに対し、本研究では、先行話者が産出したジェスチャーと類似した動作を、その直後ではない位置で、後続話者が別の連鎖の中で産出するケースを分析対象とした。具体的には、話し手が、語りの中で経験を再演（reenactment）する際に用いたジェスチャーと類似した身体動作を、別の話し手が、その後の第二の語り（second story）における再演で用いるという、語りの連鎖における身体動作の再生を分析した。第二の語りは、その前の語りと内容や構造の面で類似しており、語りの受け手は、第二の語りを語ることで、最初の語りを理解したことを例証することができる（Sacks, 1992）。

データからは、前の話し手が語りの再演の中で産出した身体動作を、その受け手は、第二の語りを構築するための資源として「再利用」していることが観察された。第二の語りの話し手は、先行話者による身体動作と全く同じ動きをそのまま再生するのではなく、先行話者が発話の中でハイライトした動きと類似した動きを、自分の語りの視点に当てはめた形で産出する。分析からは、最初の語りの受け手が、その語りで示された語り手の視点に同調する場合とそうでない場合とでは、発話と身体動作の再利用のされ方が異なることが示された。まず、第二の語りを通して同調の姿勢が示される場合は、前の話し手による身体動作と類似した動きが産出されるのみならず、前の話し手の再演に伴う発話の構造と同じ発話の構造も用いられる。それにより、前の話し手が語った語りの内容及びその焦点を、正確に理解したことが提示されるだけでなく、前の話し手が語った経験と同様の経験が自分にあることも証明される。そして、それを通して、先行する語りで表された視点に同調していることが示されていた。一方で、第二の語りの話し手が、前の話し手が示した視点に同調しない場合の第二の語りでは、身体動作と類似した動きは産出されるものの、共起する発話の構造は再利用されず、異なる焦点を持つ類似経験が語られていた。

そのように、後続話者が、先行話者が産出した身体資源や言語資源、及び発話の構造を再利用することは、先行話者が産出した行為に対し、発話のみでは示すことができない多層的な理解を示すだけでなく、先行する行為に関連して新たな行為を組み立てる手段となっていることが明らかになった。更に、いかに相互行為の参与者が、互いの発話や身体動作やそれらの構造に細かい注意を払い、いかにそれらがその後の行為の構築のために活かされているかも示された。

(3) 身体動作が主となる教授場面における、複数の受け手による身体動作の再生：

会話が中心となる場面のみならず、身体を動かすことが中心となる活動にも焦点を当てた。身体動作が中心となる活動の教授場面では、講師が身体動作を使って体の動きを実演すると、その実演の受け手である複数の生徒が各々、実演された動きを真似して再生する。そのような、実演後の再生は、実演で示された動きに対する各々の理解を示す行為である。分析では、生徒が各々、講師の動きを再生することが、いかに講師が次の指示を組み立てるための資源となっているかを示した。

上記の通り、参与者が従事している活動の性質や、参与者の参与役割によって、身体動作や発話の再生は様々な働きをするが、先行話者によって産出された発話や身体動作を再生することが、先行行為の特定の箇所に対する自分の理解を示しつつ、それに関連する新たな行為を産出する手段となっているという共通点が見出された。さらには、傍参与者が、先行話者による発話を繰り返したり、類似した身体動作を産出したりすることが、進行中の相互行為への参与役割を変化させるきっかけとなることも示された。

参考文献

- Brown, P. (1998). Conversational structure and language acquisition: the role of repetition in Tzeltal adult and child speech. *Journal of Linguistic Anthropology* 8, 197--221.
- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., & Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics* 26, 355--387.
- De Fornel, M. (1992). The return gesture: Some remarks on context, inference, and iconic gesture. In: Auer P and Di Luzio A (eds) *The Contextualization of Language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 159-176.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hayashi, M. (2003). *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Amsterdam: John Benjamins.
- 細馬宏通 (2012). 身体的解釈法 : グループホームのカンファレンスにおける介護者間のマルチモーダルな相互行為. *社会言語科学* 15(1): 102-119.
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In: Lerner GH (ed) *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 13-31.
- Koschmann, T. & LeBaron, C. (2002). Learner articulation as interactional achievement: Studying the conversation of gesture. *Cognition and Instruction* 20(2): 249-282.
- Mondada, L. (2007). Multimodal resources for turn-taking: pointing and the emergence of possible next speakers. *Discourse Studies* 9(2),194--225
- Murphy, K.M. (2005). Collaborative imagining: the interactive use of gestures, talk, and graphic representation in architectural practice. *Semiotica* 156, 113-145.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation*. Oxford, Basil Blackwell.
- Schegloff, E. A., (1997). Practices and actions: boundary cases of other-initiated repair. *Discourse Process*. 23(3), 499--545.
- Stivers, T. (2005). Modified repeats: one method for asserting primary rights from second position. *Research on Language and Social Interaction* 38 (2), 131--158.
- Tannen, D. (1989). *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Yasui, E. (2013) Collaborative idea construction: Repetition of gestures and talk in joint brainstorming. *Journal of Pragmatics* (46)1,157-172.
- 横森大輔・安井永子・初鹿野阿れ・勝田順子・市村葉子・古田朋子 (2014). 「『コネチカットね』一助詞「ね」が付与された他者発話の部分的繰り返しにみられる相互行為秩序一」*社会言語科学会第34回発表論文集*, p.158-161.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 安井永子、高梨克也、遠藤智子、高田明、杉浦秀行	4. 巻 -
2. 論文標題 相互行為における指さしの多様性 - 会話分析の視点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学会 第 42 回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 246-255
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安井永子	4. 巻 -
2. 論文標題 身体動作を伴う教授活動における通訳者の参与 日本舞踊ワークショップにおける通訳, 講師, 参加者の相互行為	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会言語科学会 第 43 回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 90-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安井 永子	4. 巻 20
2. 論文標題 直前の話し手を指さすこと 直前の発話との関連を示す資源としての指さし	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 131 ~ 145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.20.1_131	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Eiko Yasui	4. 巻 -
2. 論文標題 Display of understanding in a second story: Second tellers' reenactments and reuses of the prior teller's resources	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Text & Talk	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yokomori Daisuke, Yasui Eiko, Hajikano Are	4. 巻 123
2. 論文標題 Registering the receipt of information with a modulated stance: A study of ne-marked other-repetitions in Japanese talk-in-interaction	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 167 ~ 191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2017.06.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Eiko Yasui
2. 発表標題 Bridging between sequences: Pointing gesture in interruption of a sequence.
3. 学会等名 ICCA (International Conference on Conversation Analysis) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安井永子
2. 発表標題 からかいの対象に向けられる指さし
3. 学会等名 社会言語科学会42回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安井永子
2. 発表標題 家族の会話における大人と子どものやり取り –子どもによる大人の会話への介入–
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」III
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安井永子
2. 発表標題 身体動作を伴う教授活動における通訳者の参与 日本舞踊ワークショップにおける通訳, 講師, 参加者の相互行為
3. 学会等名 社会言語科学会43回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eiko Yasui
2. 発表標題 Other-Repetition of Gestures in the Telling of Experiences
3. 学会等名 IEMCA (the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安井永子
2. 発表標題 語りにおけるジェスチャーの繰り返しについての分析
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日常会話コーパスII」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Eiko Yasui
2. 発表標題 Other-repetition of gestures in the telling of experiences
3. 学会等名 IEMCA (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Eiko Yasui
2. 発表標題 Different roles and language proficiency levels involving a Japanese culture workshop at a Japanese university: Collaborative participation by the instructor, interpreter, and international students.
3. 学会等名 UK-Japan Symposium on intercultural communication and international universities (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 安井 永子、杉浦 秀行、高梨 克也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 指さしと相互行為	

1. 著者名 池田 佳子、片岡 邦好、秦 かおり	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお	5. 総ページ数 292
3. 書名 コミュニケーションを枠づける	

1. 著者名 Lori Czerwionka, Rachel Showstack, Judith Liskin-Gasparro	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 250
3. 書名 Contexts of Co-Constructed Discourse Interaction, Pragmatics, and Second Language Applications	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------